

肢体不自由特別支援学校の「魅力化」における地域連携コーディネーターの役割

玉木実希子*・大野 公寛**・原 広治**

Mikiko TAMAKI・Kimihiro ONO・Hiroji HARA

A Study on the Role of Coordinators in Providing School-Community Collaborations in the Educational Reform called "MIRYOKUKA" in Special School for Physically Handicapped Children

ABSTRACT

本研究は、教育の「魅力化」において期待される肢体不自由特別支援学校での「学び」について検討するとともに、地域連携コーディネーター（以下、連携Co.）を配置して「魅力化」に取り組む中で、連携Co.の必要性や果たす役割や課題及び連携Co.のかかわりが、教員の地域との連携・協働に対する意識の変容をどのように促すのかについて明らかにすることを目的とした。調査の結果、肢体不自由特別支援学校には＜地域と連携した教育活動＞を取り入れるための校内体制の構築と、＜地域で学ぶことのできる環境＞を整えていくことが求められていることが明らかになった。また、特別支援学校の連携Co.の役割は、校内や地域、県内の特別支援学校全体をつなげる機能だけでなく、教員の地域との連携・協働に対する意識改革を促す存在であるとともに、その役割は、教員との相互作用の中で連動し、深まっていく動的なものとして捉えることができた。

【キーワード：教育魅力化 地域との連携・協働 地域連携コーディネーター 共生社会】

1. 研究の背景と目的

肢体不自由のある子どもたちは、身体の動きの制約や行動のための物理的な支援の必要性から、「様々な面で経験が不足していることが多く」（海老沢, 2013）、その「日常生活の経験不足が学習のレディネスとしての経験不足と関連する」（佐藤ら, 2016）と言われている。そのため肢体不自由特別支援学校では、子どもたちが地域の中で様々なひと・もの・ことと触れ合う体験的な学びを、教育活動の中に適切に取り入れることが重要となる。

同時にこのことは、特別支援学校だけの問題ではないという側面も持っている。「車イスの子どもは同年代の子どもと比べて外出の機会が圧倒的に少ない」（佐藤ら, 2016）と述べられているように、肢体不自由のある子どもたちは、そもそも社会の中で様々な経験を積む機会を十分に持つことが難しい場合が少なくない。現状の社会は肢体不自由のある子どもたちが自由に外出できるような環境ではない、ということが問題として挙げられるのであり、子どもたちが地域で学ぶことのできる環境を整えていくこともまた必要となる。

こうした教育と社会の関係に関する特別支援教育の課題は近年の政策動向にもあらわれている。中央教育審議会分科会報告（2012）は「障害のある子どもと障害のない子どもが同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、障害のある子どもの自立と社会参加に向けて、適切な指導と必要な支援」が必要であるとし、インクルーシブ教育システムの構築と共生社会の形成という方向性を示している。また現在導入されている新学習指導要領（2017）では、「社会に開かれた教育課程」を学校教育全体の基本的な考え方とし、子どもたちの資質・能力を地域との連携・協働を通して育むことが目指されている。

これらのことは、島根県でも「しまね特別支援教育魅力化ビジョン」を策定し、2022年度から進められている。このビジョンにおいて特別支援教育の魅力化は、学校・家庭・地域の連携・協働によって障がいのある子どもたちの生きる力を育むこと、そして障がいの有無にかかわらず誰もが人格と個性を尊重し、支え合う共生社会を実現することである。

以上のことを踏まえると、肢体不自由特別支援学校においては、学校と地域の双方に変化をもたらす実践が求められていると考えられる（図1）。

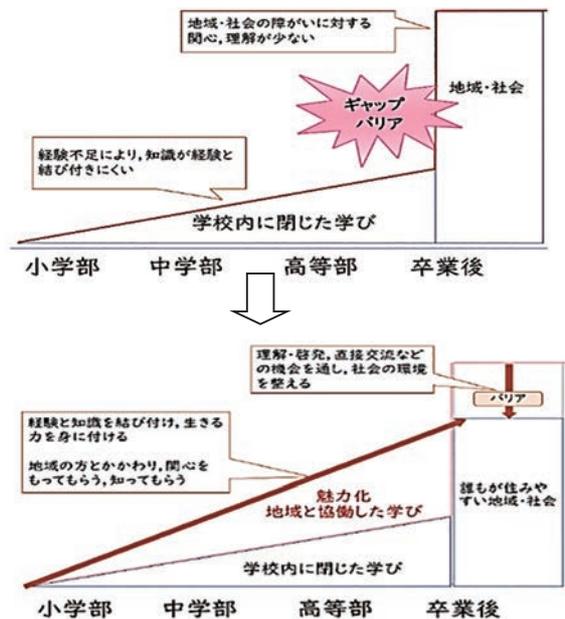


図1 特別支援学校に求められている学び

* 島根県立松江清心養護学校

** 島根大学大学院教育学研究科教育実践開発専攻

すなわち、現状の学校に閉じた学びでは、学んだ知識・技能が実生活とつながりにくく、学校での学びを社会と接続することが難しい。また、地域社会においても、まだ障がいに対する関心や理解が少なく、多くのバリアが存在する（図1上部）。従って、これからの学びには、肢体不自由学校の学びを地域に開き、＜地域と連携した教育活動＞を取り入れ、子どもたちに生きる力を育むための校内体制を構築すること、学校の学びを地域に開き、地域に向けた理解啓発を進めていく中でバリアを下げ、＜地域で学ぶことのできる環境＞を整えていくことが求められている（図1下部）。このことが、「しまね特別支援教育魅力化ビジョン」にも掲げられている地域の中で誰もがお互いに支え合い、自分らしく生き生きと生活を送ることができる共生社会を創ることにもつながっていくと考える。

しかし一方で、これらの実践を特別支援学校の教員だけで実現することは、業務負担だけを考慮しても困難と思われる。そこで注目されるのが、鳥根県が2022年度より特別支援学校に配置した「地域連携コーディネーター」（以下、連携Co.）である。連携Co.は、学校と地域を行き来してつなげながら、上記両面の課題に一体的に取り組むことができる存在として期待される。

鳥根県ではすでに、離島・中山間地域の高等学校の教育の活性化を推進する事業の一環として魅力化コーディネーターを配置してきた経緯があり、コーディネーターの活用が進んでいる。こうしたコーディネーターについて岩本ら（2019）は、「地域との協働による魅力ある高校づくりを推進するうえで鍵となるのがコーディネート機能」と述べている。この点について全国都道府県教育長協議会が2018年度に実施した「地域と学校の連携・協働におけるコーディネート機能に関する調査」によると、コーディネーターの必要性については、43都道府県が「必要」と回答している。これらのことから、高等学校の魅力化においてコーディネーターの存在は欠かせないものであると言える。

地域とのかかわりの少ない特別支援学校では、連携Co.はより一層その存在と機能強化が求められるだろう。しかしながら、特別支援学校の連携Co.は配置されて日が浅く、現状ではその役割や実践に関する検討は十分とは言えない。また、特別支援学校側も、地域との連携・協働が教員の個人的なつながりに依存していることや打ち合わせや準備に対する負担感があること（小仲，2013）、教員の中に「4つの不（不安感，不要感，不信感，不能感）」という地域との連携・協働に対する潜在的なマイナスの意識（佐藤，2016）があること等により、取組がなかなか進まない現状が想定される。

そこで本研究では、まず、教育の「魅力化」において期待される肢体不自由特別支援学校での「学び」について検討する。そしてそのことを踏まえながら、図1下図の学校内の左側の矢印の部分に着目し、連携Co.の必要性や果たす役割、課題について明らかにすることを目的とする。あわせて連携Co.のかかわりが教員の地域との

連携・協働に対する意識の変容をどのように促すのかについても見ていくこととした。このことは、特別支援学校での学びにおいて、地域と協働した教育活動を通して子どもたちに生きる力を育むことと、特別支援教育や障がいについての理解啓発を進めていく中でバリアを下げ、地域で学ぶことのできる環境を整えていくことになり、ひいては共生社会の実現へとつながっていくものと考えられる。

本研究では、2022年度から連携Co.を配置し、地域との連携・協働に積極的に取り組んでいる肢体不自由特別支援学校の鳥根県立A養護学校（以下、A校）を対象とする。A校の概要については、4（1）に記載する。

2. 研究課題の設定

先行研究や目的を踏まえ、本研究では大きく4つの研究課題を設定した。

（1）A校に対する意識や教育的ニーズの把握に向けた調査及び分析

A校にかかわる教職員、児童生徒、保護者、地域在住の方、卒業生に調査を行い、A校の教育的な課題やニーズを明らかにする。卒業生にも調査を実施することで、A校において必要な「学び」について分析する。（3章）

（2）A校で連携Co.と教員が一緒に取り組んだ授業実践の分析

202X+1年度からA校に配置された連携Co.と教員が一緒に取り組んだ地域と協働した授業実践を分析し、連携Co.がどのようなかわりをし、教員にどのような変容が起こったかを分析する。（4章）

（3）A校で連携Co.の担った役割や成果・課題の調査及び分析

連携Co.が配置され、うまく活用できた学級とそうでない学級がある中で、全教職員を対象に調査を実施し、A校において連携Co.の担った役割や意義、よりうまく活用するための課題等について分析する。（5章）

（4）連携Co.の役割とその役割がよりうまく機能するための方策の提案

連携Co.が果たす役割や意義が明確になる一方、課題もあると考えられる。毎年継続して連携Co.が安心して働け、よりうまく機能するために必要なことについて提案する。（6，7章）

なお、全ての分析に当たっては、特別支援教育に精通した大学教員により検討を行った。本論文では、本研究の課題に即して必要な項目についての結果のみ記載する。今回の論文で扱わない質問項目の結果については、稿を改めたい。また、全ての調査対象者には、事前に研究の目的や個人情報の取り扱いなどについて書面で提示し、本研究の推進並びに発表についての同意が得られている。

3. A校に対する意識や期待される学びについて

(1) A校の教職員への調査

1) 方法

A校の教職員69名を対象に202X+1年2月に質問紙調査を実施し、67名の回答(回答率97%)を得た。主な質問事項は、「地域との連携・協働の必要性や意欲」「児童生徒にとって地域との連携・協働を行う意義」「地域との連携・協働に取り組む上での課題」であった。必要性や意欲については、「必要性を感じる(5)～必要性を感じない(1)」「取り組みたい(5)～取り組みたくない(1)」の5件法で、その理由等については自由記述で回答を求めた。

これらは調査項目ごとに単純集計し、全体の傾向を把握することとした。また、自由記述については、内容を一つの意味をなす文章のまとまりごとに分け、内容の類似性によって分類した。

2) 結果と考察

この調査より、地域との連携・協働に対し、図2のような結果が得られた。

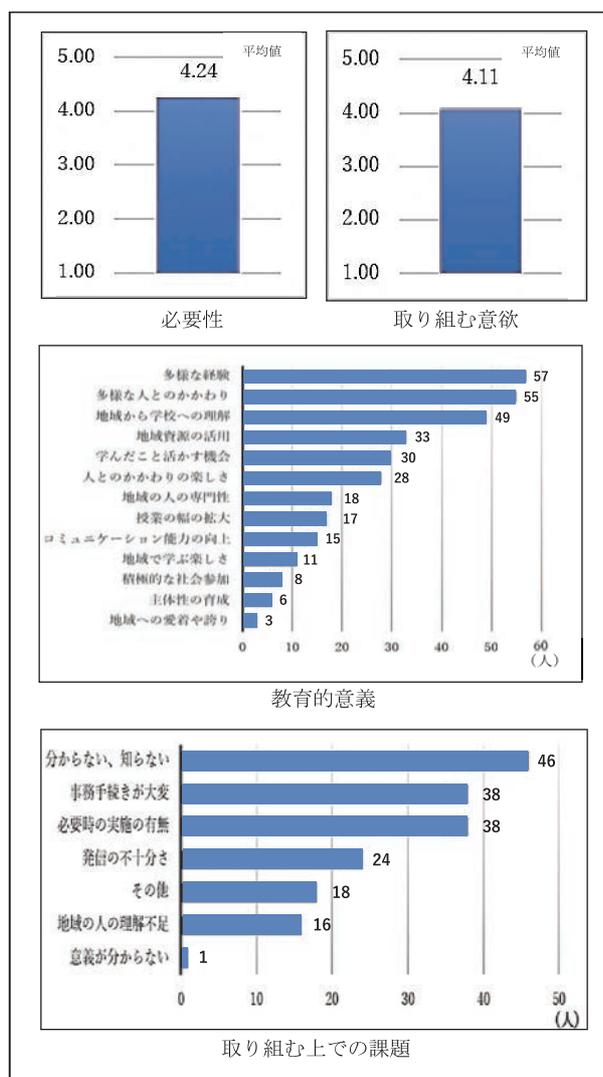


図2 地域との連携・協働に関する調査結果 (n = 67)

A校の教職員は、地域との連携・協働は子どもの育ちにとって必要(平均値4.24/5)だと考えているとともに、「多様な経験」「多様な人とのかかわり」「地域の方の学校・子ども理解の深まり」等の教育的意義を感じており、取り組む意欲は高い(平均値4.11/5)ことが分かった。

しかし、実際にはなかなか進んでいない現状に鑑み、地域との連携・協働を進める上での課題を聞いたところ、「(教職員自身が)どこまで協働したらよいか分からない」「地域について知らない」「事務手続きが大変」「(児童生徒の学びに)必要な時に実施できない」が上位を占めた。A校においても、地域との協働が教職員の個人的なつながりに依存していたり、負担感が大きかったりすることから、地域との連携・協働に取り組みにくい現状が浮き彫りとなった。

(2) 児童生徒及び保護者への調査

1) 方法

児童生徒66名、保護者65名を対象に202X年10月に質問紙調査を実施し、児童生徒は30名(小学部10名、中学部10名、高等部10名 回答率45%)、保護者は50名(回答率77%)の回答を得た。児童生徒への主な質問事項は、「もっと魅力的な学校にするためにはどうしたらよいか」であり、保護者への主な質問事項は、「学校を地域に知ってもらうための取組としてどんなことが思いつくか」「魅力ある学校づくりのために、どのようなことに取り組むとよいか」であった。それぞれ自由記述で回答を求めた。

これらは調査項目ごとに集計し、自由記述の内容を一つの意味をなす文章のまとまりごとに分け、内容の類似性によって分類した。

2) 結果と考察

この調査より、A校をより魅力的な学校にするための取組について、児童生徒からの意見は表1、保護者からの意見は表2のような結果が得られた。

児童生徒からは、「学習の充実」が、保護者からも、「児童生徒一人一人に合った学習環境の充実」があがった。児童生徒のやりたいことを実現しつつ、安心して楽しく過ごせる環境づくりが求められていると言える。

一方、児童生徒からは、「他学部や地域と交流すること」という意見も多くあげられており、地域の中で学ぶことに前向きで意欲的な様子が感じられる結果となった。保護者からも同様に、「学校から地域へ情報発信し、理解啓発をすすめる」や「学校と地域が様々な活動を通して交流すること」の意見が多くあがっており、教育活動を通して地域とつながること、地域の中で学びを深めることが求められていると言える。

また保護者の回答からは、「学校と地域の交流」と「地域の理解啓発」を一体的(図1の下の方にある2つの矢印を同時)に捉えていることも明らかになった。A校が積極的に情報発信しながら、地域の方とのかかわる機会をつくっていくことが求められていると言える。

表1 魅力的な学校にするための取組（児童生徒）

分類名	記述内容例
学習の充実	・プールにもっと入りたい ・もっと音楽がしたい ・部活がしたい
他学部との交流	・他の学部の人と一緒に勉強したり、話したりしたい
地域との交流	・外に出て色々なことをしたい ・他学部の友だちや地域の人とかかわる機会が増えるといいと思います ・色々な人（他の学校、仕事をしている人）とつながると楽しい

表2 魅力的な学校にするための取組（保護者）

分類名	記述内容例
地域との交流・理解啓発	・地域や社会とつながりが多くもてる教育活動 ・地域の方への理解を深め、つながりを広げる活動としての校外学習 ・養護学校としての視点から市民をつないでいく取組 ・個性を生かした取り組みを発信し、地域への理解啓発を行う
児童生徒に合った学習環境の提供	・児童生徒が過ごしやすい環境作り ・生徒全員が「毎日通学したい」楽しい学校づくり ・児童生徒一人一人に向き合い、笑顔の絶えない学校

（3）地域在住の方への調査

1）方法

A校のある地域在住の方1070名を対象に202X年10～11月に質問紙調査を実施し、322名の回答（回答率31%）を得た。主な質問項目は、「児童生徒と一緒に活動できそうなこと及びその際の心配事」「学校に期待すること」であり、それぞれ自由記述で回答を求めた。

これらは調査項目ごとに集計し、自由記述の内容を一つの意味をなす文章のまとまりごとに分け、内容の類似性によって分類した。

2）結果と考察

地域の方の中には、A校や児童生徒にかかわりたい思いはあるが、不安なことや心配なこと（表3）があるために消極的になってしまっている様子がうかがえた。A校には、地域で暮らす方々に対し、特別支援教育や子どもへのかかわり方について伝えたり、情報発信をしたりして理解啓発を行いながら、地域の方と児童生徒がかかわる機会をつくっていく必要性が明らかになった。

また、「学校に期待すること」の自由記述の中に、A校が継続して取り組んでいる近隣の小学校との学校間交流についての記述を、表4にまとめた。これらの記述から、長年継続しているこの学校間交流の有効性が示唆された。そして、本人はもとより子どもが学校間交流を行うことを通して、その家族もA校や児童生徒のことを身近に感じ、かかわることに抵抗感が減っていることも分かった。

表3 地域の方が児童生徒とかかわる上で心配なこと

分類名	記述内容例
コミュニケーション	・コミュニケーション等、基本的な知識や経験が乏しいこと ・声掛けの仕方、接し方など。意思疎通ができるか ・コミュニケーションがうまくとれるか心配
健康・安全面	・身体の状態やどんな配慮をすればいいかわからない ・けがをさせないか、体調が悪くならないか心配
知識・経験の不足	・接したことがないから分からない。まずは知るところから ・かかわる機会がないので、どのようにかかわったらいいかわからない ・経験がないので心配なことも思いつかない ・分からないので、答えようがない
研修の機会	・障がいに対する知識を事前に教えてほしい ・学校のことや子どもたちの様子を知りたい ・車いすの介助、かかわり方など事前を知っておきたい
特になし	・何も心配なことはないが、機会がない ・特に心配なことはない

表4 近隣の小学校との学校間交流の意義

記述内容例
・小学校に子どもが通っているとき、子ども同士の交流を見てきました。子どもは純粋で、子ども同士自然な姿、自然な助け合いをしていました
・自分が小学校の時には、1、2回小学校と養護学校との交流が毎年あった。子どものころからの交流があったので、今も身近に感じています
・子どもが小学校に通っていました。養護学校の皆さんとの交流をとっても楽しみにしていました。今後も小学校との交流があるといいと思います
・現在、小学生の子どもが、養護学校の皆さんと交流がありますが、スポーツなどをしていて、「どう？会話やお互いの言うことが分かる？」と聞くと、「全然大丈夫だよ」とか「少し間があるかもしれないけど分かるよ」と言っています

（4）卒業生への調査

1）方法

A校の卒業生8名（男性7名・女性1名、19～46歳、在学中の教育課程は準ずる教育課程5名、知的障がい特別支援学校の各教科等を中心とした教育課程3名）に対し、202X年10月～202X+1年1月、60～90分の半構造化面接を個別に行った。主な質問項目は、「卒業後の地域や他者とのかかわりの変化」「学校で学んでよかった、役に立ったと思えたこと」「学校でこんな勉強しておいた方がよかったと思うこと」であった。面接後、逐語録を作成し、内容を一つの意味をなす文章のまとまりごとに分け、内容の類似性によって分類し、分類名を付けた。

2）結果と考察

A校を卒業し、地域社会で生活している卒業生に、実践校での学びと社会生活について質問することを通して、A校の教育活動に求められていることやその課題について考えた。インタビュー調査の結果、卒業後に地域・人とのかかわりが広がっていくことはあまりないことが明らかになった（表5）。

表5 卒業後の地域・人とのかかわり

発言内容例
・仕事で会社に来られた人と話すくらいです
・就職して職場の方々とも多少は話しますが、業務連絡程度しか会話がなく、あまり関係を広げられていないのが現状です
・同年代の人とのつながりは、学校時代の友だちくらいかな
・職場と家の往復。地域とのかかわりはない
・サービスを利用しながら一人暮らしをしているが、地域とのつながりはあまりない
・自宅から通学していた。兄もいたので、一緒に遊んだり仲良くなったりした。地元で友だちがいたのは大きい。地元とのつながりは幅が広がる

また、卒業生の言葉の中には表6に示す「社会の厳しさ」に関するものも多かった。

表6 「社会の厳しさ」について

発言内容例
・A校はみんな人の話を聞こうと思って聞いてくれるんです。関心をもってくれるんです。でも社会に出るとそういう人ばかりではないんですね。自分からかかわらないといけない。でもどうやって入って行ったらいいかわからない。私たちみたいにより人の助けを必要とする人はなおさらですね。
・社会人になると、自分がなかなかできないことで、周りに余計な気を遣わせたり、ストレスをためさせたりすることが多々あり、悔しく歯がゆい思いをすることがあります。自分の未熟さやふがいなさを実感しています。社会は厳しいことがよくわかりました。
・障がい者理解を言葉で言うのはできるんですよ。そのまま寄り添ってとか、障がい者の視点に立ってとか。簡単に分かるものではないと思います。関わることで初めているんかなと感じてもらえることができるし、大切だと思います。中には失敗というか上手くいかないこととか、衝突とか起こると思うんですね。でもやっぱりそれを含めての理解だと思うんです。そう簡単に、知識だけで本当に理解するっていうのは難しいと思います。むしろこういう経験をどれだけしていけるかっていうのが、本当の課題かもしれないです。
・親は永遠にいると思っているけど、親は先に亡くなるんですよ。その後どうするか。兄弟にはその人の人生もあるし、日本は住みやすい国と言いつつもバリアばかりですし、自分のことを知ってもらって、助けてもらえる人を作っておくことは大切です。

卒業後にかかわった社会は、彼らにとって、厳しく、生きにくいものであったことが察せられた。また、同時にその厳しさを、自分のコミュニケーション能力の低さや経験の不足からくるものだと帰責し、後輩にそのような努力を求める姿がうかがえた。しかし、社会が障がいのある人をそのまま受け入れ、誰もがその人らしく生きられる社会であったならば、彼らが卒業後に感じる社会の印象も違っていただろうか。そう考えたとき、障がいや特別支援教育についての社会への理解啓発をより一層進め、共生社会を実現していくことが必要不可欠であると考えられた。

(5) 小括

(1)～(4)の調査から、学びを学校に閉じるのではなく、地域社会に開き、在学中から様々なひと・もの・こととかかわる経験をすること、すなわち、地域と協働し、自分で試行錯誤したり、失敗したりしながら体験的に学んでいくことの必要性が示唆された。

また、バリアフリーの社会といえども、まだまだ障がいのある人にとっては厳しい社会であり、これからも誰もが住みやすい共生社会を実現していけるように、学校も努力していかなければならない。その第一歩として、

まずは子どもが住む地域や学校のある地域に暮らす方たちに対して障がいへの理解を深め、かかわってくれる人を増やしていくことが大切であると考えられた。

そのためには、地域との連携・協働を通して、理解啓発を進めていくことが必要となる。情報を伝えるだけでなく、場を共有したり、積極的に一緒に取り組む機会を作ったりすることがA校に求められている(図3)。

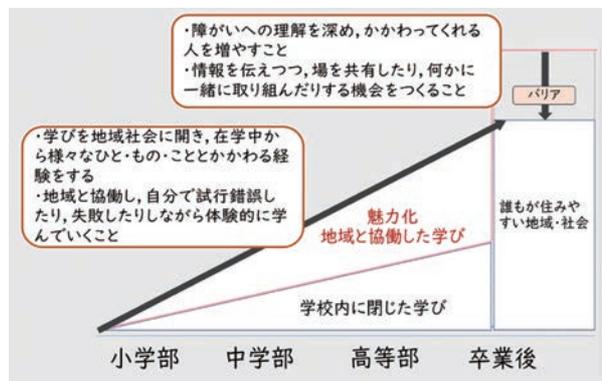


図3 A校に求められている在り方

4. A校で取り組んだ地域との協働の実践

(1) A校の概要

A校は肢体不自由特別支援学校で、小学部6学級、中学部5学級、高等部6学級からなり、児童生徒数64名である。児童生徒は様々な地域から通ってきている。「単一障害」「重複障害」「重度重複障害」の学級があり、訪問教育も行っている。教育課程は「準ずる教育課程」「知的障害特別支援学校代替の教育課程」「自立活動を中心とした教育課程」の3つに大きく分かれているが、個々の実態に合わせてさらに細かく教育課程を編成している。卒業後は、福祉サービス(生活介護、就労訓練等)利用、施設入所、進学、一般就労等多様である。卒業後の生活の拠点は自宅となる児童生徒が多い。

A校の地域との協働の実態としては、コロナ禍で様々な制限からあまり実施されていないが、それ以前も行事や交流及び共同学習等での限定的なものとなっていたり、地域と協働した学習を行っている学級もあるが、個人のつながりで行っていたりするという課題があった。

A校は202X+1年4月から県の地域連携強化事業の一環として連携Co.が配置され、「魅力化」の取組を行っている。202X+1年度は「1学級1単元1地域」の取組を組織的に行っており、まずは各学級の実態に応じて、地域とかかわる取組に挑戦した。

(2) A校における連携Co.と筆者の立場

A校では、連携Co.に、地域との連携を強化するための、地域や関係諸機関等との連携・調整をすることを担って欲しいと考え、役割としては、教員が地域と協働してやりたいことを具現化していく支援をすること、連携Co.が有する「学校外のネットワーク」を活用して、校外の組織や人材と学校をつなぐこと、A校の教職員に向けた研修や提案などをし、地域資源活用の魅力を伝えて

いくこと等とした。また、地域のニーズを把握し、そのニーズの解決に向け、協働できる体制を構築すること、広報活動を促進することも期待された。

連携Co.は202X+1年4月から採用となり、年度更新の契約で、年間160時間程度の非常勤勤務である。年齢は30代で、松江市地域資源活用コーディネーター（地域おこし協力）としてIターンした後、現在は人の想いや関係性に焦点をあて、関係性をデザインする個人事業（パラレルワーカー）を行っている方である。様々なプロジェクトにおいて、コーディネーターやメンター、講師、ファシリテーター、企画・運営などを担当した経験を持つ。教職経験はなく、地域とのつながりが豊富であることから、採用が決定した。A校の校長は、教職員と連携Co.をつなげる役割を担う教員を配置するとともに、連携Co.が配置されたことや大まかな役割について、年度当初に全教職員に周知した。しかし、連携Co.には情報共有のための共通パソコンの配布はなく、内部の情報にはアクセスできない状況であった。

筆者は、校内の教職員と連携Co.を繋げる役割の教員としての立場にある。教職員、連携Co.、筆者が協働しながら、授業の相談や授業実践を行い、その過程を分析したり、質問紙調査やインタビュー調査を行ったりすることで、成果や課題を明らかにしていった。

（3）地域と協働した授業実践

202X+1年度に連携Co.がかかわった授業実践は多岐にわたる。授業の相談を受け、授業担当教員と一緒に考えていった授業、実施したい学習の具体的なイメージを聞くことを通して、地域の方とつなげた授業、授業を深めていくメンバーとして参加した授業、各学級からの相談を受け、校内の他学部をつないだ授業等である。また、一緒に話す機会を設定することで、その学級担任の思いを聞き、担任のやりたいことの実現につなげたケースもある。

A校においては、全学級が学級の児童生徒の実態に合わせ、様々な地域に出たり、地域の人とかかわったりする学習に取り組んだ。また、近隣の公民館から依頼を受けて、「地域の独居老人や障がいのある方等に手紙や手紙の台紙を作る」活動や「学校のある地域を元気にするために行燈を作る」活動に取り組んだ。地域側から依頼を受けたのはその時が初めてであり、学校にいながら地域貢献ができる活動として、多くの学級がこれらの活動に取り組んだ。

このように様々な取組を行ってきた中で、連携Co.がかかわったことで学習が深まった授業実践を取り上げる。

1) 学校内外をつないだ授業実践

① 授業の概要

取り上げるのは、中学部の学級（生徒3名、以下Xさん、Yさん、Zさん）が取り組んだ「みんなに優しいまち作りプロジェクト」である。

高齢化社会に伴い、肢体不自由の方が増え、日常的に障がい者と接する機会やメディア等で目にする機会も増

えている。しかし、バリアフリーな社会になってきたとはいえ、まだ社会の中には物理的障壁が多いのも事実である。

そこで、車イスを使用しているA校の生徒が実際に観光地に行き、それぞれが見つけた観光地のバリアについて、バリアフリーにする方法を考え、地域の方に提案した授業実践である。

② 授業の流れ

まずは身近な学校にあるバリアフリーについて考え、調べ学習を通してバリアフリーに対する知識や理解を深めた。

そして、第1回目のフィールドワークで実際に観光地に行き歩いてみることで、それぞれの生徒が「みんなに優しいまちにするための課題」を見つけ、その改善方法について考えた。考えるにあたり、観光地をよく知る地域の方とリモートで話をしたり、友だちや教員と相談したり、自分で調べたりした。第2回目のフィールドワークでは、自分の考えたバリアフリーに向けた改善方法を実際に試してみた。

その体験を踏まえ、友だちと相談しながら、様々な改善方法を考えて、まとめていった。学習発表会では同じ学部の保護者に発表する機会を設けたり、さらには、観光地にかかわりのある地域の方約10人に集まっていたりし、自分たちの考えた観光地のバリアフリーについて提案した。

③ 連携Co.の役割

連携Co.は、単元計画を考えていくところから参画した。地域との協働のあり方、考え方について伝えたり、教員と連携Co.が様々な意見を出し合ったりしながら授業構想を練っていった。

生徒の実態や授業のねらいから、どこの誰とつなぐと生徒の学びが深まるかを模索しながら進めていった。その際には、地域と学校の連携がうまくいくように、地域の方への情報提供、情報共有を行った。

最初は教員と地域の方との連絡調整も行っていたが、今後も学校として地域とつながっていくために、よりよいタイミングで教員と地域の方が直接つながるように橋渡しをし、直接連絡を取れるように移行していった。

④ 生徒の変容

授業を行った教員へのインタビューや筆者が授業に参加しながら記録したフィールドノートをもとに生徒の行動や発言を分析することで、この単元を通しての生徒の変容が見えてきた。

関係する教員によると、3人の生徒は、初対面の人や普段かかわりのない人とのコミュニケーションを苦手とし、緊張や不安からなかなか話すことができないという傾向を持つ。今回の活動では、リモートで実施した地域の方との初対面の交流で、地域の方にすぐに慣れ、少しずつ自分たちからかかわることができるようになった。その方に関心を持ち「直接会ってみたい」という思いを抱くことが、学習の意欲につながっている様子であった。

第1回目のフィールドワークでは、1時間程度という

短時間での観光地の散策であったが、普段外出経験があまりない3人の生徒たちは、その日をとても楽しみにしていた。このフィールドワークでは、観光地の撮影スポットである赤い橋の上で記念写真を撮る予定であった。しかしYさんだけは、段差が多く、車イスを持ち上げてもらわないと渡れない橋が怖く、一緒に写真を撮ることができなかった。その経験が、この単元を通して、「何とかして自分の車イスでも行きたい。その実現方法を考えたい。」という意欲につながり、最後まで試行錯誤しながら改善方法を考えることにつながったと思われる。

第2回目のフィールドワークでは、自分たちが考えてきた改善方法を現地で実際に試す活動を行った。あまり感情を表に出さないXさんが、自分の考えた方法がうまくいき、「あ、行ける！」と笑顔になり、友だちが考えた方法も積極的に試した後、「やってみてよかった。私が考えた方がやりやすい。」と満足そうにするなど、地域の中で実際に経験することを通して、自分の考え方を洗練させ、自信を持つことにつながった。障がいがあることで経験が少ないといわれているA校の生徒たちにとっては、地域に出かけ、実際にやってみることに、すなわち、身体的な経験やリアルな生活文脈を通して社会を知ることには大きな意義があると思われた。

フィールドワークの後に行ったまとめの授業では、自分の考えやアイデアを積極的に伝えようと、普段はあまり手を挙げて発表しない3人の生徒たちが、全員自ら手を挙げて発表する等、主体的に学習に取り組む姿が見られた。さらに、人とかわかることや人前で発表することがあまり得意ではなく、消極的な傾向のある3人の生徒たちであったが、観光地のバリアフリーについて、「地域の方に提案する機会があったらやってみない？」という教員の問いに「はい」と即答し、10人の地域の方の前で、自分たちの意見を堂々と発表することができた。これは、前述したように、地域の中で経験しながら考える活動を行ったことにより、バリアフリーの問題をより自分事として捉えられるようになり、自分の意見に自信がもてるようになったことの結果であると考えられる。またZさんは、これまで自身の将来について考えることを苦手としていたが、学校から地域に出てバリアフリーについて調べたことや、地域で生き生きと働く大人とかわかったことで、「自分も将来こんな仕事をしたい」と思うきっかけとなった。この授業実践を通した、真正な学びや憧れる大人との出会いが生徒の将来やりたいこと(夢)につながった可能性がある。

⑤ かかわった地域の方の変容

この実践を通して、教員と協働して授業に参画された地域の方や最後のまとめの提案発表を聞きに来てくださった方にも、意識の変容が認められた。地域の方の発言をまとめると、表7のとおりである。

表7 地域の方の意識の変容

分類名	発言内容例
障がいに対する考え方の変容	<p>・最初はコーディネーターからの依頼を受け、「お手伝いをさせていただこうかな」という気持ちで受けたスタートだった。自分に障がいがないから、最初はどう接したらいいかわからない部分があった。声かけ一つにしてもすぐ考えながら行っていた。障がいのある人もない人もみんな笑っていて欲しい。この子たちも常に楽しく、笑っていられるようにかかわりたいと思っている。もっと勉強しないといけないと感じた</p> <p>・子どもたちとかわかる中で、勇気とか元気をもらっていた。子どもたちはこの観光地を変えようと一生懸命やってくれている。障がいのある子どもたちが一生懸命考えてくれているのに、自分は何をやっているんだろう、弱音を吐いている場合じゃない。もっと頑張ろうと思わせてくれた</p> <p>・実際に会って話してみないと分からないこともあるし、だからこそ色々な人に発表を聞いてほしかった</p>
バリアへの気づき	<p>・子どもたちが実際にトイレを見学する様子を見て、「ここって意外に狭い」と感じた。道は狭いし、すれ違えないし、奥の方にあるし、ユニバーサルデザインではないなって感じた。また、温泉街も実は緩い上り坂になっていて、もしかしたらそれ自体がユニバーサルデザインではないな、と。自分が思っていないところが狭かったり急だったりで、それも勉強になったし、色々なことを考える時間でした。他にも安全面とかも気になりました</p> <p>・障がいのある方は自分たちと違う感じ方をしていると思う。自分たちが壁だと感じていることが、彼女たちにはとても高い壁かもしれない</p> <p>・(生徒たちが車イスでお店の前にいる様子を見て)今まで、車イスの人だけでなく、お年寄りの方やベビーカーの方たちも素通りされていたのかもしれない</p> <p>・自分たちが気付かなかった視点や工夫があって参考になった。自分たちができることからやってみようと思うし、他の人にも相談してみようと思う</p>

まず1点目は、障がいに関する考え方の変容である。最初は障がいのある人にどう接したらよいか分からず悩んだり、声かけの内容や言葉の選択等にも気を遣ったりされていた。しかし、子どもたちと出会い、一緒に活動することによって、障がいのある人に関心をもったり、もっと知りたいと思ってもらったりするきっかけになったと考えられた。また、子どもたちとかわかる中で勇気や元気をもらったと感じた方もおられた。

子どもたちとのかかわりが、地域の方の心を動かし、「実際に会って話してみないと分からないこともあるし、だからこそいろいろな人に発表を聞いてほしかった」という思いにつながったと言えよう。そしてその思いが、さらに地域の方々を動かし、生徒が行った「バリアについての発表会」に、地域の方の10人の参加を得て開催でき、観光地のバリアフリーについて生徒と地域の方が一緒に考える機会をつくることへとつなげることができた。

2点目は、地域の方のバリアへの気づきである。子どもたちが車イスで観光地を散策したり、調べたりしている様子を見て、自分たちが普段当たり前前に過ごしている環境も、実は障がいのある人にとっては狭かったり、坂道が急だったりするということが気づかれることが多くあった。また、車イスの人が困っている様子を見て、それ以外の人たちも困っていたかもしれないという思考に発展させながら、地域の方も観光地のことを考えるきっかけづくりとなった。子どもたちが地域に出て活動することで、地域の方が観光地のバリアに気づき、観光地について考え直すきっかけづくりになったと言えそうである。

5. 連携Co.が授業づくりや授業実践に参画することで生じる影響（効果）

(1) A校における連携Co.に対する意識調査及び分析

1) 方法

A校の教職員70名を対象に202X+1年11月に質問紙調査を実施し、68名の回答（回答率97%）を得た。主な質問事項は、「地域との連携・協働の必要性や意欲」「連携Co.の必要性や連携」であった。必要性や意欲、連携については、「必要性を感じる（5）～必要性を感じない（1）」「取り組みたい（5）～取り組みたくない（1）」「うまくいった（5）～うまくいかなかった（1）」の5件法で、その理由等については自由記述で回答を求めた。

これらは調査項目ごとに単純集計し、全体の傾向を把握することとした。また項目によってはクロス集計を行い、連携Co.とのかかわりがあった教員（関わり有）となかった教員（関わり無）についての相関関係や傾向を把握することとした。自由記述については、内容を一つの意味をなす文章のまとまりごとに分け、内容の類似性によって分類し、分類名を付けた。

2) 結果と考察

調査から、「魅力化」を進めるための連携Co.の配置の必要性は、平均値が4.53/5という高い数値となった（図4）。また、必要性の低い1又は2の選択者はいなかった。連携Co.とのかかわりの有無で違いがあるかについてt検定を行った結果、関わり有、関わり無の必要性の値には、有意な差が認められなかった（ $p>.05$ ）。すなわち、関わりの有無にかかわらず連携Co.の必要性を感じていることが明らかになった。

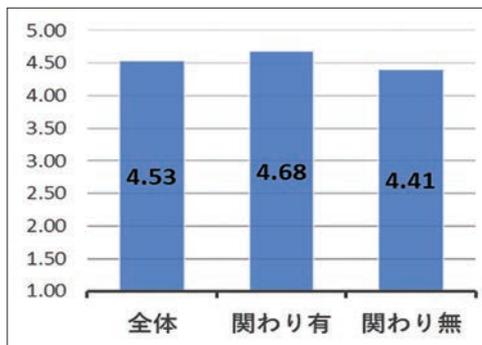


図4 連携Co.の必要性（n=68）

そして、「連携Co.が必要だと考える」理由についての自由記述をまとめると、表8のようになった。

連携Co.が必要だと考える理由としては、「地域人材や教育資源について詳しい」「教育実践上の必要な地域資源とつないでくれる」「学校と地域双方の窓口になってくれる」等であった。子どもの成長を見据えながら、個人ではなく学校（組織）として地域とつながり、その際には連携Co.が窓口となって学校や学級の様子を事前に伝えたり、打ち合わせの日程調整をしたりと、連携Co.との連携が実感されていた。また、連携Co.の存在により、校内の他学部との連携ができたことに気づく教員が多くいた。連携Co.と一緒に教育活動を実践す

表8 連携Co.が必要だと考える理由

分類名	記述内容例
適切な地域資源との接続	<ul style="list-style-type: none"> ・連携Co.の専門性やネットワークが活用できる ・地域とのつながりについて、「こうしたい」という思いを、学校としてコーディネートしてくださる方がおられると助かる ・自分たちだけではつながりたい所とうまくつながれないことが多い
相談・後押し	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の知識や情報の範囲はとても狭いので、相談に乗ってもらったり、アドバイスをいただいたりできる ・授業の計画や展開していく中で、地域とかかわりたい場面や内容について気軽に相談できる存在だから ・地域とつながっている人が校内にいて、コーディネートしてくれとやりたいことへの実現の道筋が見えやすそう ・先入観や否定論ではなく、様々な角度からアプローチしたり、「やってみよう」という形で学校内、地域につなぐきっかけづくりになったりする
負担の軽減	<ul style="list-style-type: none"> ・相手方と連絡を取っていただけるので助かる。日程調整も ・日々勤務の中、地域へ出向くことが困難。また、何をどうしていいのかわからない中で、適した相手とつなげるところまでしてもらえるから
地域と学校の窓口	<ul style="list-style-type: none"> ・地域との橋渡し（窓口）をしてくれる方がいることが、外部が学校とつながる入り口として大切
他学部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・他学部と繋げてもらえ、一緒に学習を行えたから

ることで、その必要性が次第に高まっていくと推察できた。

次に、「魅力化」において必要だと考えられている連携Co.との連携がうまくいったかについて5件法で質問した結果が図5である。あわせて、連携が「うまくいった」または「うまくいかなかった」理由について、「うまくいった」に関するものを表9に、「うまくいかなかった」に関するものを表10にまとめた。（全てn=68）

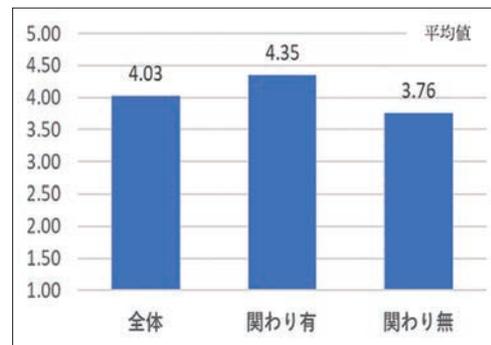


図5 連携Co.との連携がうまくいったか

連携Co.との連携がうまくいったかについては、平均値が4.03となり、比較的連携がうまくいったと感じているという結果が得られた。また回答の中で、うまくいかなかった=1を選択した教員はいなかった。

連携Co.と授業においてかかわりがあった教員の平均値は4.35であり、かかわりがなかった教員の平均値は3.76であった。この双方で違いがあるかを検討するためにt検定を行った結果、かかわりがある教員はかかわりが無い教員より、有意に値が高いことが認められた（ $p<.01$ ）。このことから、当然ではあるが、実際に連携Co.と共に授業を行った教員の方が、より連携がうまくいったと感じていることが明らかになった。

表9 連携Co.と連携がうまくいったと考える理由

分類名	記述内容例
相談しやすい環境・雰囲気	<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターの方から積極的に声をかけてくださったので ・コーディネーターが休み番というか敷居を下げてくれた。いい雰囲気でやりやすい空間を“間”を作ってくれた ・負担にならない程度で声をかけて頂き、計画を後押しして下さる ・「まず相談してみよう！」という雰囲気ができてきた ・担任のニーズを聞いてもらう機会を設定してもらい、各学級やクラスの子どもの実態に応じたニーズを把握してもらった ・各学級と話す機会をもち、よりよい方法を提案・相談していただいた ・相談できる雰囲気があり、気軽に相談できた ・学級でコーディネーターの方と相談会ができたことで、地域との連携のイメージが具体的なものとなった
授業の広がり・深まり	<ul style="list-style-type: none"> ・計画していることに対して、アドバイスをもらい実行することができた ・学習活動に必要な外部との連携・調整で大変お世話になり、よい学習ができた ・活動が狭まる中で新しい体験をさせてもらったり、話が聞けたりしたことは良かった ・色々な授業の幅が広がったと思う。来年度ももっと連携していきたい ・コーディネーターから得た情報が取組を考えたり、進めたりしている上でとても役に立ったから

表10 連携Co.と連携がうまくいかなかったと考える理由

分類名	記述内容例
役割の共通理解不足	<ul style="list-style-type: none"> ・何をしてもらえるのが良くわからない ・コーディネーターの仕事がどういうものなのか分りにくい ・相談に行くとき様々な選択肢をくれるが、そもそもそれを知らない人がいると感じている ・コーディネーターをどう活用していくのか、校内でもわからない部分がある
勤務時間の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・共同での作業時間が短く、思ったような意思の疎通ができなかった ・常駐までではない。情報が得たい、協力して欲しいときにおられない ・もう少し学校にいてくださると、聞きたいときに聞けてより良かった ・今年は学校に毎日おられなかったため、もう少しおられると相談しやすいかった
かかわりが少ない	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の学級は連携して取り組む機会がなかったためあまり分らない ・かかわりがなかった

連携Co.との連携がうまくいったと考える理由としては、連携Co.が積極的に話しかけるなど相談しやすい雰囲気や環境をつくったことや、連携Co.に相談することで、授業が深まったり広がったりし、地域との連携が進んだことを実感していることが挙げられた。

一方、連携Co.との連携がうまくいかなかったと考える理由としては、まだ連携Co.の役割について明確でなく、共通理解が図られていなかったことや、勤務時間の関係で、学校にいる日や時間が限られているため、必要な時に相談ができなかったこと、実際に連携ができなかったことなどが挙げられた。

(2) 連携Co.と協働した授業実践と教員の意識調査

1) 授業にかかわった教員の変容

全教職員への調査の結果、連携Co.と一緒に地域と協働した授業実践に取り組む中で、教員の地域との協働に対する抵抗感の軽減や意識の変容があることが見えてきた。

そこで、連携Co.と連携しながら地域と協働した学習に取り組んだ教員の意識の変容に焦点を当て、より詳しく分析することとした。

① 調査対象者

対象は202X+1年度に連携Co.と連携し観光地のバリアフリーを考える授業実践に取り組んだ学級の担任2名である。I教諭は、教職経験1～5年、自身が地域とのかかわりの中で学生生活を送り、地域の中で学ぶことがいい思い出として残っている教員である。J教諭は、教職経験11～16年目、自身が総合的な学習の時間で地域とかわったが、あまり良い経験としては残っておらず、自身も新たな人とのかかわりが得意ではないと感じている教員である。

② 手続き

観光地のバリアフリーの実践が終わった202X+1年11月に、半構造化面接を個別で行った。調査時間は1人80分程度であった。主な質問内容は、授業実践の各場面においての意識や行動、及びそのきっかけとなる要因、連携Co.や地域との協働に対する意識の変容についてである。

③ 分析方法

この分析においては、非可逆的な時間における地域との協働に対する意識の変容のプロセスとその要因について多層化させて描くのと同時に、プロセス自体に焦点を当てて分析することがねらいであったので、安田・サトウ(2012)を参考に、TEM (Trajectory Equifinality Model: 伏線経路・等至性モデル)を用いて、分析することとした。TEMによる分析は、以下の手順で行った。

まず、インタビューデータをもとに、逐語録を作成し、インタビュー場面の様子や非言語の行動に鑑みながら文字データを読み込んだ。そしてそれを意味のまとまりごとに切片化した。EEP (Equifinality Point: 等至点)として「地域との協働に前向き」を設定し、EEPに至る経路について、BFP (Bifurcation Point: 分岐点)、OPP (Obligatory Passage Point: 必須通過点)、SD (Social Direction: 社会的方向付け)、SG (Social Guidance: 社会的ガイド)を研究目的に従って表11のように設定した。

表11 TEMの用語と本研究の位置づけ

概念	本研究での位置づけ
等至点: EFP	EFP: 地域との協働に前向き
両極化した等至点: P-EFP	P-EFP: 地域との協働に消極的
分岐点: BFP	BFP 1: 連携Co.と相談する BFP 2: 地域の方との出会い BFP 3: フィールドワークに出る
必須通過点: OPP	OPP: 子どもたちの変容を実感する
社会的方向付け: SD	SD 1: 学級で進めないといけな体制
社会的ガイド: SG	SD 2: 教育課程 SD 3: 連携Co.の役割の共通理解不足 SG: 連携Co.の存在

そして、EFPである「地域との協働に前向き」に至る意識の変容を図に示した。その際、連携Co.による直接的影響や間接的影響を考慮した。分析、検討に当たっては、特別支援教育に精通した大学教員により検討した。

2) 結果と考察

I教諭とJ教諭へのインタビューから、連携Co.と連携しながら地域と協働した授業実践をもとに、TEM図を描いた。

I教諭の変容を図式化したものを図6に、J教諭の変容を図式化したものを図7に示し、「授業構想・導入の時期」を第Ⅰ期、「授業を通して地域のひと・もの・ことに会う時期」を第Ⅱ期、「提案発表にむけてまとめの時期」を第Ⅲ期として、教員の地域との協働に対する意識や捉えの変容について結果を示し、考察した。I教諭の変容については表12に、J教諭の変容については表13に示した。

表12 I教諭の変容

①第Ⅰ期：授業構想・導入の時期

I教諭は、観光地のバリアフリープロジェクトを行うにあたり、地域のひと・もの・ことをどのように学習に取り入れていくかが見えなくて不安を抱えていた。I教諭自身も小中学生の頃は地域とかかわっており、地域が身近に感じられるその経験が良かったと感じているため、地域とかかわることに対しては前向きな気持ちである。

しかし、住んでいる地域から離れた学校に通い、地域との関係が作りにくい特別支援学校の子どもたちにとって、地域とかかわることが大事だとは思いつつも、子どもたちが地域とかかわる際のイメージがもてずに悩んでいた。そこで、今年度配置された連携Co.に相談し、観光地の情報を提供してもらったり、観光地でどんな活動ができるか等を一緒に考えたりしていくことで、地域との協働のイメージが少しでき、「ワクワクして、やりたいな」という気持ちになった。連携Co.に相談したことが、前向きになるきっかけとなったことから、「連携Co.への相談」を分岐点とした。この分岐点がなければ、取組が進まなかったり、内容が大幅に違ったりしていたと考えられる。

一方、教育課程で時数が決まっているため、子どもたちにやって欲しいことがある中で、調べ学習を通して出てきた子どもたちのやりたいことをどこまで取り上げるかについて悩んだ。また、連携Co.の授業への入り方やかわり方が共通理解できていなかったことから、少しやりにくさを感じていた。

②第Ⅱ期：授業を通して地域のひと・もの・ことに会う時期

授業を一緒に考えてくれる地域の方が決まり、教員と地域の方が顔合わせを行った。教員も最初は「きちんとしなきゃ」と緊張していたが、地域の方と話していくうちに、その方の雰囲気や子どもたちの好きそうな雰囲気であり、子どもたちとその方のかかわりが楽しみになっていった。連携Co.が教員の思いや授業のねらい、生徒の実態に応じて地域の方をマッチングしたことが社会的ガイドとなり、その地域の方と教員の出会いがより地域との協働が楽しみになるきっかけとなった。

実際に生徒が地域の方とリモートで会い、子どもたちが地域の方の話真剣に聞きながら一生懸命メモをとったり、自分から質問したりしている姿を見て、I教諭は実際に地域の方と子どもたちが会うことや、観光地に行ってみることが楽しみになってきた。

フィールドワークでは、子どもたちが観光地に行き、先日リモートで会った地域の方や観光地のお店の方等とかかわったり、生徒それぞれが考えてきたバリアフリーの方法について実際に試したりする活動を行った。生徒がフィールドワークをすごく楽しみにしている姿や、自分の考えてきたバリアフリーの方法がうまくいって喜んだり、「やってみてよかった」と言ったりしている姿を見て、実際に地域に出て体験することの大切さを感じるようになった。

また、子どもたちが活動している様子を見ることで、地域の方が「ここって意外に坂がきついんだ」、「ここって狭

いんだね」等今まで気づけなかったバリアに気づいている姿を目の当たりにすることで、子どもたちが地域に出ることで、地域の方の気づきにつながるという意義を感じるようになった。このフィールドワークでの気づきこそが、I教諭の地域との協働の捉えが「子どもたちにとっての地域との協働」から「子どもたちと地域の方にとっての地域との協働」に変容したきっかけとなったと言える。

授業の途中で、I教諭が観光地に行き、学校にいる生徒たちとリモートでバリアフリーについて学習する機会があった。この学習では、I教諭自身が車イスに乗って、バリアフリーについてのリモート学習を行ったが、授業実践後には、この場面は「地域の方に車イスに乗ってもらえばよかった」と振り返っている。地域の方が車イスに乗ることで、子どもたちが地域の方に色々伝える機会になるとともに、地域の方にもっとバリアについて理解してもらおうきっかけ作りができたのではないかと感じている。

③第Ⅲ期：提案発表に向けてまとめの時期

フィールドワークが終わった後、地域の方に提案するためにバリアフリーについてのまとめ学習を行った。どの生徒もフィールドワークに出る前に比べ、発言回数が増える等、授業に前向きに取り組むようになり、「自分なら」と課題を自分事として捉えられるようになった。また、体験したことで理解が深まり、自分からあまり発言しなかった生徒が、一番多く発言するようになった。このような子どもたちの変容を受け、I教諭は地域に出て体験的に学ぶことによる子どもたちの変容を実感する。そして「もっと地域に出て行く機会をつくりたい」、「地域で色々な経験をして欲しい」と考えるようになった。

また、この時期に実践校で開催された研修会で聞いた内容（特別支援学校の子どもたちも「客体」ではなく「主体的」に地域に貢献する活動が大切である）が、I教諭の今回の授業実践と結び付き、より地域との協働の意義を感じるようになった。この単元を通して、I教諭自身が地域と協働した授業を経験したことで、地域と協働した授業に対する抵抗感や不安感が軽減し、子どもたちにとってだけでなく、地域の方にとっても気づきや学びの機会となる地域との協働をもっと学習に取り入れたいと考えるようになった。

④まとめ

以上、地域との協働におけるI教諭の意識の変容について、時間とプロセスの視点から描出した。

年度当初、地域との協働について、「やらないといけないこと」、「子どもたちにとって意味があること」などは考えているが、具体的なイメージがもてず、模索していた（第Ⅰ期）。

しかし、実際に地域の方とかかわったり、フィールドワークに出て様々な体験をしたりしている子どもたちの様子や地域の方のバリアに気づく様子を見て、地域に出て体験することの大切さや子どもたちが地域に出ることが地域の方の気づきを促すことになるということに気づくようになった（第Ⅱ期）。

地域に出て様々な体験をした後の子どもたちの前向きな変容や地域の方の気づきを目の当たりにすることで、地域との協働を授業にもっと取り入れ、子どもたちが地域の方とかかわったり、様々な体験をしたりして欲しいと考えるようになった。また、地域との協働が、子どもたちにとってだけでなく、地域の方にとっても気づきのきっかけや学びになるような取組にしていきたいと考えるようになった（第Ⅲ期）。

表13 J教諭の変容

①第Ⅰ期：授業構想・導入の時期

J教諭は、観光地のバリアフリープロジェクトを行うにあたり、年度当初に年間計画にどのように位置づけ、何からやったらいいのか分からなくて困っていた。また、J教諭は中学生の頃は、総合的な学習の時間が導入された模索期のころで、その時の経験から地域と協働した学習にあま

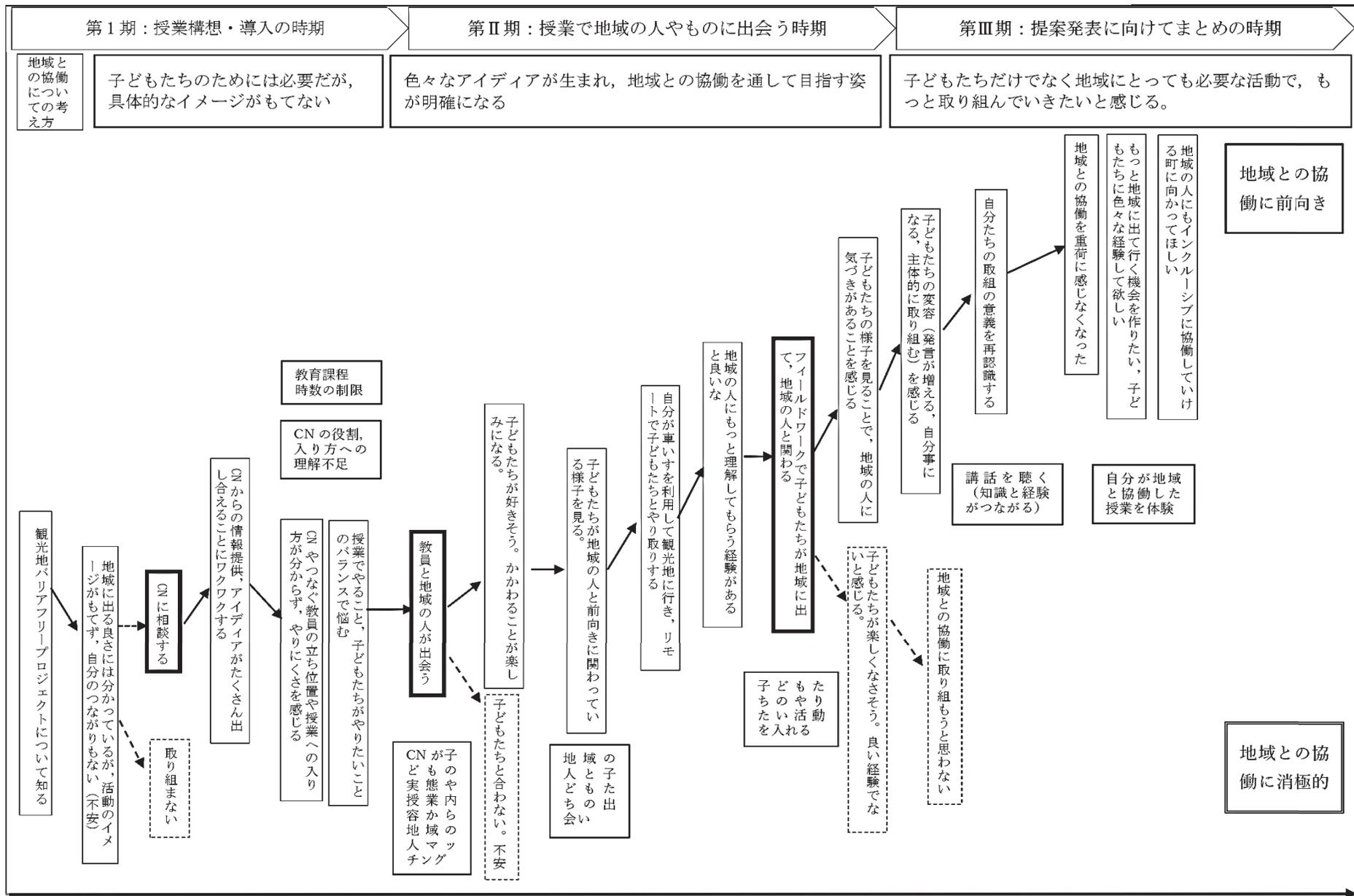


図6 I教諭の地域との協働に対する意識の変容

りいいイメージをもっておらず、J教諭自身も新しい人とのかかわりが苦手なため、地域との協働が子どもたちにとって良い経験であることは理解しているものの、前向きになれずにいた。

そこで、今年度配置された連携Co.に相談し、話し合うことで、「何かを教えてもらったりするのではなくて、一緒に考えてもらう、作ってもらうという地域の方のかかわり方もあるんだ」ということを知り、地域との協働に対する考え方が柔軟になった。また、連携Co.と話すことで、様々なアイデアが出てきたことにより、観光地のバリアフリープロジェクトの内容が深まったと感じた。

これらのことにより、連携Co.に相談したことで、「地域との協働の取組がやりやすくなった」と感じた。後に「連携Co.に相談しなければ、観光地に行き、そこで少し人とかかわって終わりにしていたかもしれません」と述べているように、ここで連携Co.に相談したことが、分岐点となり、地域との協働への意識が変わり、前向きに取り組んでいくきっかけとなったと言える。この分岐点がなければ、取組が進まなかったり、内容が大幅に違ったりしていたと考えられる。

しかし、教育課程で時数が決まっていることから、アイデアが広がっても、それを全て学習に取り入れることは難しく、「広がりすぎるとどこにもゴールできなくなる」という懸念から、子どもの声や気づきを拾いにくくなることにつながった。また、連携Co.の授業への入り方やかかわり方が明確でなかったことから、やりにくさを感じるようになった。

②第Ⅱ期：授業を通して地域のひと・もの・ことに出会う時期

授業を一緒に考えてくれる地域の方が決まり、教員と地域の方が顔合わせを行った。地域の方と話していくうちに、「子どもたちが話しやすそう。この地域の方との出会いはうまくいきそうだ。」と感じた。連携Co.が生徒の実態や授業のねらいに応じて地域の方をマッチングしたことが社会的ガイドとなったと言える。

第1回のフィールドワークは、当初は行く予定はなかったが、「1度観光地を見た方が、イメージがわきやすいのでは？」と連携Co.にアドバイスをもらい実施することにした。あまり時間がなく観光地を短時間で散策するのみだったので、J教諭はそこに楽しみがあるとはあまり感じていなかった。

しかし、子どもたちがその散策をととても楽しんでいる様子を見て、「子どもたちにとっては、こんなこともスペシャルなくらい経験がないんだ」ということを実感した。このフィールドワークで1度観光地に行ったことで、第2回のフィールドワークに向けて、子どもたちは意欲的にバリアフリーについて考えるようになり、考えも深まっていったと感じた。子どもたちと地域の方がリモートでかかわる場面では、子どもたちが楽しんでいる様子を見て、今後のかかわりが楽しみになる一方、リモートではなかなか伝わらない生徒もいる様子を見て、直接かかわることの必要性を実感した。

また、第2回のフィールドワークで子どもたちが観光地に行き、地域の人とかかわったり、自分の考えてきたバリアフリーの方法について実際に試したりする活動を通して、自分が思っている以上に、地域に出ることを含め、学校の外に出て様々な体験をすること全てが子どもたちにとっては特別な経験であることを感じ、「地域の中で学ぶことは、子どもたちにとってとても大切な取組であり、これからも色々な経験をさせてあげたい」と感じるきっかけとなった。

③第Ⅲ期：提案発表に向けてまとめの時期

第Ⅲ期の意識の変容は、J教諭もI教諭と同様である。フィールドワークから帰った後、地域の方にバリアフリーの提案をするためにまとめを行った。どの生徒もフィールドワークに出る前に比べ、発言回数が増える等、授業に前向きに取り組むようになり、「自分なら…」と自分事として課題を捉えられるようになった。

また、体験したことで理解が深まり、自分からあまり発言しなかった生徒が、誰よりも多く発言するようになった。そんな子どもたちの姿を見て、J教諭も地域に出て体験的に学ぶことによる子どもたちの変容を実感する。

この時期に実践校で開催された研修会で聞いた内容（特別支援学校の子どもたちも「客体」ではなく「主体的」に地域に貢献する活動が大切である）が、J教諭の今回の授業実践と結び付き、より地域との協働の意義を感じるようになった。

J教諭は、「この地域とかかわる体験が高等部3年まで積み上げられることが子どもたちの将来の姿に変容をもたらす」と考え、「地域との協働は大切で、当たり前に行えるようになるとうい」と感じようになった。しかし、「大切だけど、やっぱり自分だけでやるのは大変で、難しい。でも連携Co.がいてくれたらできると思う」と地域との協働を実施するためには、連携Co.の存在は必要であると感じている。

④まとめ

以上、地域との協働におけるJ教諭の意識の変容について、時間とプロセスの視点から描出した。J教諭も年度当初、地域との協働について、やらないといけないことであり、子どもたちにとって意義があることだとは理解していた。しかし、個人のつながりで地域との協働を行うことの難しさから、前向きになれない部分もあった。そこで連携Co.と一緒に考えることで、地域との協働の捉え方が変わり、地域との協働に前向きになっていった（第Ⅰ期）。

実際に地域の方とかかわったり、フィールドワークに出て色々な体験をしたりしている子どもたちの様子を見て、子どもたちの経験不足を実感したり、リモート学習の限界を感じたりすることで、子どもたちが地域に出て体験することの必要性や大切さに気づくことになり、もっと色々なことを経験させてあげたいと思う気持ちにつながった（第Ⅱ期）。

地域に出て様々な体験をした後の子どもたちの前向きな変容を見て、地域との協働を通して高等部3年生まで積み上げられる体験が、子どもたちの将来の姿に変容をもたらすと考え、地域との協働が当たり前に行えるようになるとよいと感じるようになった。しかし、それは個人で行うことは難しいので、そういう環境を作るためには、連携Co.の存在は大切であると感じている（第Ⅲ期）。

(3) 教員の変容を支えた連携Co.のかかわり

地域と協働した学習に取り組んだ教員の意識の変容を詳しく見ていく中で、その変容のきっかけとなっているものには、連携Co.の存在やかかわりが大きいということが見えてきた。そこで、連携Co.にどのようなことを意識しながら教員とかかわっていたのかについて調査した。

1) 方法

A校の連携Co.1名を対象に202X+1年11月に半構造化面接を実施した。主な質問事項は、「連携Co.として教員との話し合いの時に気を付けていたこと」「地域の方とつなげる時のマッチング方法・配慮点」「学校と地域との協働がうまくいくように配慮した点」であった。面接後、逐語録を作成し、発言内容を教員の意識の変容の図と対応させていくことにした。

2) 結果と考察

結果を教員の意識の変容を追った際の期ごとにまとめて示し、それぞれの項目ごとに考察を行った。

① 第Ⅰ期：授業構想・導入の時期

第Ⅰ期において、連携Co.が意識していたことや気づきについては表14に示したとおりである。

表14 連携Co.が意識していたこと・気づき

分類名	発言内容例
教員の思いを尊重する姿勢	・どんな風に考えてるのかとか、先生たちがどう思っているのかを聞こうと思っていた ・やるにあたってどんな気持ちかな、どんな先生かな、と聞いて聞く
教員の思いを引き出す問いかけ	・「どうなったらいいと思いますか」等問いを投げってみることで、先生や相手から引き出すことをしたい ・この視点を教えてほしいな、と相手に聞くようにしている
教員の思いを後押し	・先生の思いをもとに作っていく。あるものをとか外とつなげてとか ・連携Co. だけではつukれない。先生たちの思いがあれば、それを何とかはできる ・ここどうしようってなったら相談にものれるし、一緒に考えられるけど

連携Co. は教員の人となりや思い、やりたいこと等を具体的に知ることを大切にしていた。それは授業を一緒につくっていく上で、教員の思いを大切に、その思いをもとに、一緒に考えながら、広げたり深めたりしたいと考えていたからである。

教員の思いが具体的にない際も、連携Co. から提案するのではなく、教員の思いを引き出すような問いを投げかけることで、教員自身が思いや考えに気づけるように寄り添うようにしていた。

その教員の思いを大切にしながら後押ししてくれるような連携Co. のかわかりが、教員の安心感や、ワクワク感につながっていったと考えられる。

② 第Ⅱ期：授業を通して地域のひと・もの・ことに会う時期

第Ⅱ期において、連携Co. が意識していたことや気づきについては表15に示したとおりである。

地域の方とつなげる際には、連携Co. は、教員から児童生徒の実態や、「どういう状況で、どういう人とつなぎたいのか、何のためか」などの思いを聞き、それを連携Co. 自身が理解した上で、地域のどの方とつなげるのが最適であるかを考えていた。だからこそ、教員がつなげてもらった地域の方と会ったときに、「子どもたちが好きそうだな」、「授業がうまいきそうだな」という印象を受けることにつながったと考えられる。

そして、地域の方が安心してA校や子どもたちにかかわってもらえるように、学校や子どもたちと、どのようにかかわって欲しいか等について、丁寧に情報提供をしてくれていた。また、地域の方が不安や困ったことがあったときには、いつでも相談できるような体制を作ってくれていた。

教員と地域の方がよりうまくつながっていきけるように、事前にお互いを知ったり、授業に対する目線合わせをしたりする機会を設けるようにしたが、連携Co. はその様子を見ながら、自身がどのような立ち位置で関わっているか判断し、必要に応じて教員と地域の方の間に入りながら、教員と地域の方がよりよい関係性をつくっていきけるように配慮していた。

表15 連携Co.が意識していたこと・気づき

○地域の方とつなげるとき

分類名	発言内容例
つなぐ相手の人選 (教員の思いと子どもの様子を考慮)	・最初は授業の目的とかビジョンがふわっとしてるがゆえに誰とつなげばいいのか、つなぎ先は最初から考えてましたね ・授業の内容に合うのは観光地の観光協会かな、と。あとは人柄で、何も決まっていなくても一緒に作ってってくれるような人がいいなと思った。一緒に相談のつてくれたり、相手を尊重しながらいい形を作ってくれたりする人 ・人選は大切だと感じていて。最後に発表をしたって言っていたので、表現するプロでもある方を選んだ ・先生が一番知っている子どもたちのことを聞いて、どういう状況で、どういう人とつなぎたいのか、何のためか聞いてから、自分がそこを理解してからじゃないとつなげないようにしている
地域の方への安心感の醸成	・決まりきったものではなくて、先生たちも手探りだから一緒に作ってってもらえると嬉しいな、という伝え方 ・連携Co. も一緒に入るから、何か気になることがあったら聞いてね、という状態にはしていた ・学校の動きや小さな情報提供はしていた。様子を見て、必要なところはする
教員と地域の方の関係づくり	・事前の打ち合わせでは、何のためにかかわってもらいたいのか、どこを一緒に作っていききたいかという授業を一緒に作っていきっていく目線合わせをしたいし、関係性を作っていききたい ・顔合わせの様子を見て、まだ直接つなぐより、しばらくは自分が間に入る方がいいなと感じた

○フィールドワークのとき

生徒との関係づくり	・子どもたちの実態を知るためには一緒に行ってよかったし、子どもたちにとっても連携Co. に親近感がわくといいなと思っていた
生徒への関わり	・多言語のQRについて話したのも、先生が気付かなくて、子どもたちが気付くことがいくつかあったらいいなって思ってた ・暑かったから、私たちはいいけど2回目も夏にするのは厳しいんじゃないかと感じていた。地域との協働をやるのが目的になって、体調崩したら意味がないなって
授業の工夫への気づき	・赤い橋をのぼったことも、それが次の授業につながって、すごいな、こうやってやるんだって思った ・観光地に行くと、先生たちがいるいる工夫をしているのを見て、すごく考えるなって思ってた
授業に対する考え方	・課題解決と言われても実際難しくくて、ここが好き、ここに興味あるところから入った方がいいなと感じている。好きから入ると、自然とその地域のことに興味持つし、そこから気づきにつながっていくから ・2回目のフィールドワークも浴衣を着るっていう、子どもたちがやりたいことも入っていて、色々なものを見て設計にしたのは良かった
手放すことの大切さ	・担任が直接地域の方と連絡すると、連携Co. に何の情報も入ってこなくなる。でもそれでいいと思ってる

また、地域との協働における一番の理想は、学校、教員、地域で当たり前前に連携・協働できるようになることであるため、連携Co. がよりよいタイミングで教員と地域の方を直接つなげるように橋渡ししてくれた。

③ 全体を通して

全体を通して、連携Co. が意識していたことや気づきについての発言内容を表16に示した。

連携Co. は、授業は自分だけではつukれないので、教員の思いを大切につなげていききたいと常に考えていた。そのためにも、同じ目線でフランクに話せる存在でありたい、いつでも何でも相談できる存在でありたいと思いつながら教員にかかわっていた。

また勤務時間が限られているため、子どもたちにかかわって何かをすることは難しいと考え、地域とつながり

表16 連携Co.が意識していたこと・気づき

分類名	発言内容例
連携 Co. のスタンス	<p>・話しにくい人じゃないってことが分かってもらえればよかった。この人同じ目線で考えてくれるな、フランクに話せるな、いつでも何でも相談できそうって思ってもらえる方がいい</p> <p>・授業は連携 Co. だけでは作れない。先生たちの思いがあれば、それを何とかはできるけど。挑戦したり、悩んでいることの相談にのったり、一緒に考えたりはできる</p> <p>・連携 Co. がかわることで先生方の視野が広がったり、柔軟になつたりするのいいなって思った。答えが決まっていな事ばかりじゃないですか、世の中って自分が限られた時間の中で、私が子どもたちにかかわって何かって言うよりは、私が入ったことで、先生たちにアプローチできたらいいなって感じている</p>

つつ、授業を展開していく教員の視点が広がったり、柔軟になつたりできるようにアプローチするように心がけていた。

この調査から見えてきた教員の意識の変容を支える連携Co.のかかわりについて、教員の意識の変容との関連を捉えやすくするために示したのが次頁の図8である。図中のI教諭とJ教諭の意識変容部分については、図6と図7に示したものと同一である。

教員の思いを尊重しながらも、自然に視野の広がりや柔軟な考えを加えてくれる連携Co.のかかわりこそが、教員の地域との協働への考え方や意欲を少しずつ動かしたと考えられ、それこそが特別支援学校の連携Co.の大きな役割であると言える。

6. A校における連携Co.の役割と意義

(1) 全体の調査から見えてきた役割と成果

1) A校における連携Co.の役割

明らかになったA校での連携Co.の役割を図9に示した。

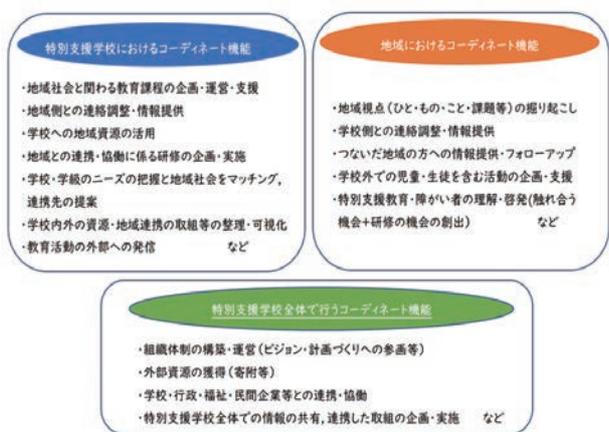


図9 A校での連携Co.の役割

現状の勤務体制では、教員の必要性に応じて、相談にのったり、地域の方とつないだりする、学校内におけるコーディネート機能中心の取組となった。

2) 連携Co.が配置された成果

連携Co.の配置が学校にもたらした成果や効果についてまとめると次のようになった。

① 学校内がつながる

4(1)で述べたように、A校は小学部・中学部・高等部と3学部あり、様々な教育課程がある学校である。今まで各学部、学級で多様な取組がされていたが、それをお互いに共有できていなかった。

しかし、連携Co.が配置されたことにより、連携Co.に授業の相談をすることが増え、各学級の情報が連携Co.に集まってくるようになった。そこで、部分的に合同で取り組めそうな学級や一緒に取り組むとより深まりや広がり生まれそうな学級に声をかけ、それぞれをつないできた。それは学部・学級を超え、校内で多様な学びの機会をつくることにつながったと言える。

今後、さらに校内の連携が深められるようにするためには、地域との連携・協働の取組や、各学級のニーズ、地域資源等を可視化し、全体で共有できるようにしていくことが必要である。また、事前打ち合わせや日程調整なども行ってもらえるので、地域と連携・協働するための教員の負担軽減にもつながり、地域とかわることへのハードルが下がったと考えられる。

② 学校と地域がつながり、子どもたちに多様な学びの場が準備できる

多様な経験が少ないと考えられる特別支援学校の子どもたちにとって、地域に出て様々な人とかわったり、体験したりすることで、経験と知識を結び付けながら学んでいくことはとても大切なことである。地域に出て、本物の中で体験しながら学ぶ環境を作っていくことが、連携Co.の配置によって実現されてきた。

その際、単なる情報発信・情報収集によってつなげるのではなく、連携Co.が教員のニーズや子どもたちの様子を把握し、自身のもっているつながりを活かしながら、真正な学びの環境を作っていたことがとても重要であった。

③ 地域とかわることのハードルが下がる

連携Co.が配置されるまでは、地域との連携・協働を行う際には、教員個人のつながりがなくとも実施することが難しかった。しかし、連携Co.が配置されたことで、個人のつながりがなくても、やりたいこと、つながりたいひと・もの・ことを相談することで、地域の方とマッチングし、つなげてくれるようになった。実際に地域に出て学んだ子どもたちが課題を自分事として捉え、主体的に授業に取り組むようになった例もあるように、子どもたちの実態に合った真正な学びの環境をつくるのが、子どもたちの変容につながっていくと考えられる。これは教員だけ、連携Co.だけでは実現していけないのではなく、一緒に考え、つなげていくからこそ実現可能だと言える。

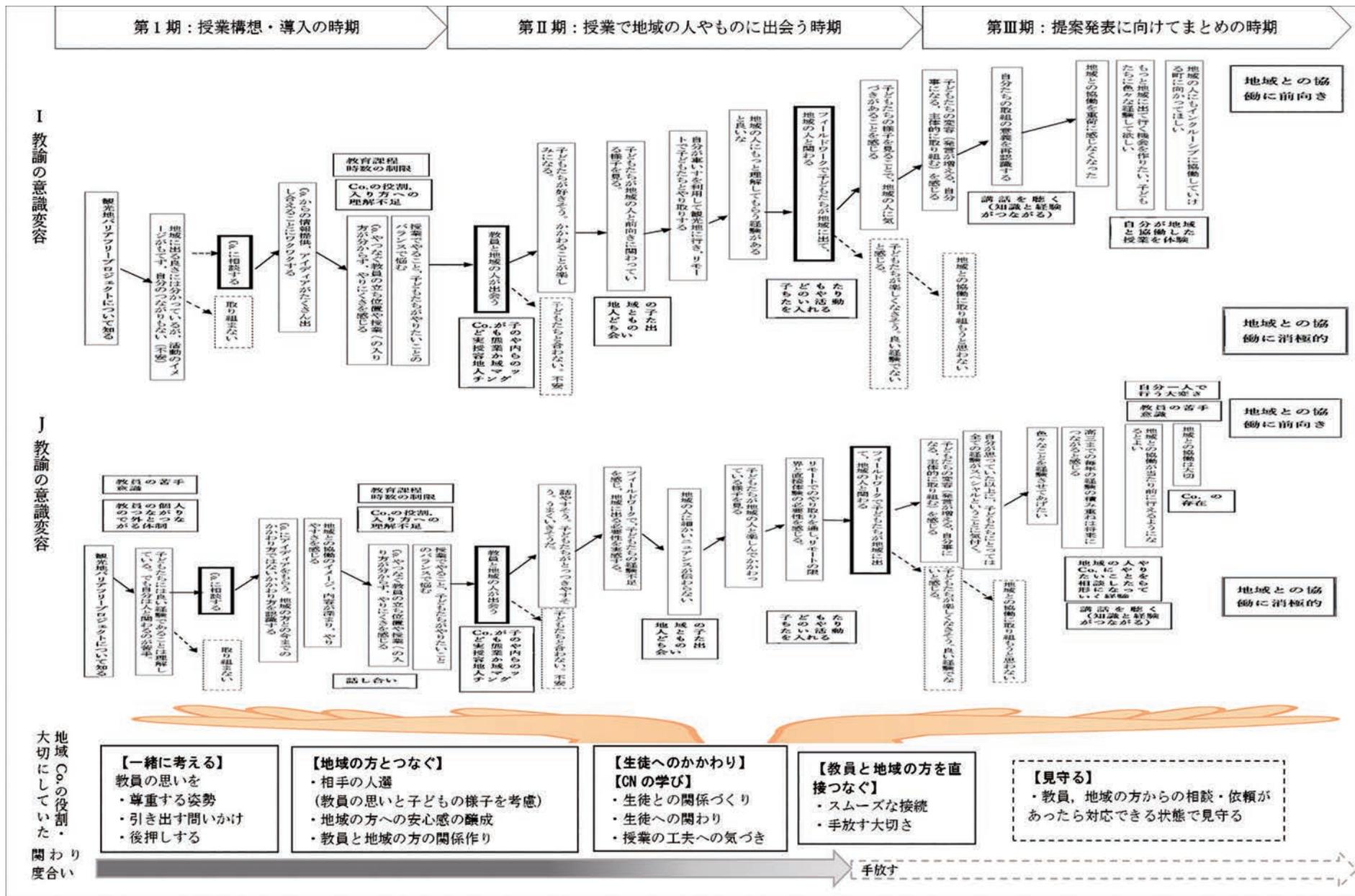


図8 教員の意識の変容を支える連携Co.のかかわり

④ 校内に地域の情報が発信される

連携Co.が配置され、今まで閉じていた学校が、少しずつ地域に開かれ、そして教員や子どもたちが地域に出て行き地域の中で様々な人とかかわったり、多様な経験をしたりできるようになった。

そのかかわりの中で、子どもたちや学校のことを知ってもらえることができ、地域の方から、活動の依頼があったり、活動に誘われたりするようになった。連携Co.が窓口となったことで、地域の方が誰に伝えと、学校と協働した取組ができるのかが明確になったことも、積極的に声をかけてもらえるようになった理由であると考えられた。

また、地域に広くつながりをもっている連携Co.だからこそ、地域の情報を校内に発信してくれ、かかわりが広がりつつある。情報の面でも学校が少しずつ開かれてきていると言える。

(2) 授業実践を一緒に行った教員の意識変容からみえてきた連携Co.の役割と成果

地域との協働の意義を感じているものの、その実践には抵抗があった教員のマイナス意識が、連携Co.と一緒に授業実践を行うことで、子どもや地域の方の変容をもたらす意義ある取組であることが実感できた。それにより、教員は地域のひと・もの・こととかかわりながら、より豊かな教育活動をやりたいとするプラス意識に変容していった。

また、A校の連携Co.はこれまで特別支援教育に不案内だったが、教員と一緒に活動することで、その教育や障がいに関する理解を深めていった。その中で、教員の思いを大切にすることはもとより、子ども一人ひとりを把握し、必要で適切な支援を考慮しながら個に応じた地域のひと・もの・ことをコーディネートしていった。

このような連携Co.と教員の相互作用による意識の変容や役割の深化こそが、今までなかなか進まなかった地域との協働を含む「魅力化」の推進力となっていくと考えられた。そして、子どもたちは地域の中で体験的に学ぶことで、学びを広げたり、深めたりしながら生きる力を育むことに、地域の方には特別支援学校や障がいのある子どもたちの理解を深め、社会のバリアに気づく契機になると思えた。

とすれば、連携Co.の役割は、図9で示したように機能的な捉えだけでなく、図10で示したような教員との相互作用の中で連動し深まっていく動的なものとして捉えることができた。

7. 連携Co.がうまく機能するための課題

(1) 地域との協働をより進めるための勤務体制の整備

学校と地域との連携・協働を進めていくためには、学校内におけるコーディネートだけでなく、地域のバリアを下げるための取組は重要で、そのために必要な地域におけるコーディネート機能をもっと充実させていく必要性がある。

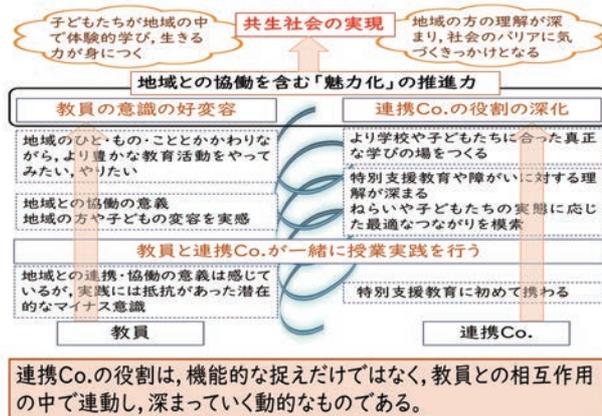


図10 連携Co.と教員の相互作用

1) 勤務時間の増加

「魅力化」において、学校と地域社会の両方向を変えていくための実践を行う必要があり、その双方を繋げながら一体的に進めていくことが大切である。そのためにも、地域におけるコーディネート機能や特別支援学校全体で行うコーディネート機能の充実が必要である。連携Co.が果たすべき役割に応じた勤務時間・勤務体制が必要である。

2) 情報共有の手段

連携Co.は、学校内の情報にアクセスする手段がなく、児童生徒の実態把握や実践、地域資源等様々な情報を整理・可視化し共有したりしようとしても容易にできない状況である。連携Co.が学級や子どもたちのことを理解した上で、地域とつないでくれるからこそ、今年度の実践のような成果があったと考えられる。従って、校内の情報にアクセスしたり、情報を共有したりするための手段・方法を検討していく必要がある。

(2) 連携Co.と教員をつなぐ地域連携担当教員の配置

連携Co.は限られた勤務時間の中で、学校全体のことを把握したり、教員と連携したりすることは難しい。その点を担当教員が補いつつ、担任と連携Co.をつなげながら、その両者と共に授業を考えていくことで、活動の幅が広がったり、深まったりすることになった。連携Co.が安心して働け、かつ教員とうまく連携しながら、役割を遂行していくためにも、双方をつなげ、相互作用を促進する担当教員の存在（配置）は不可欠である。

(3) 連携Co.同士のつながりをつくる担当者会の実施

特別支援学校の「魅力化」のゴールは、共生社会の実現である。共生社会を目指す取組だからこそ、特別支援学校全体がゴールを共有し、同じ思いで、同じ方向を向いて、一緒に取り組んでいくことが大切である。連携Co.が校内や学校と地域をつないだように、特別支援学校同士のつながりを深め、障がい種を超えて、同じゴールに向かって共に取り組めるような実践を考え、大きな

流れを作っていくことが必要だと言える。そのためには、各校の地域連携担当教員や連携Co.がゴールを共有したり、情報や意見交換を行ったりする場や機会を設定することが急務である。

8. 今後の課題

本研究における成果や意義については先述してきたとおりである。今後の課題としては、以下の3点が挙げられる。

1 点目は、他の特別支援学校における連携Co.の役割についての検証である。本研究により、A校の連携Co.の役割は明確にすることができた。しかし、他の障がい種の特別支援学校ではどのようなニーズがあり、どのような役割が求められているのか検証する必要がある。このことを通して、特別支援学校の連携Co.に求められる資質・能力についても明らかにしていくことも必要である。

2 点目は、連携Co.がよりうまく機能するための環境整備である。本研究により、特別支援学校の「魅力化」において、連携Co.は重要な役割を担っており、必要不可欠な存在であることが明確になった。しかし、その多岐にわたる役割を遂行しようとしたときに、現在の勤務体制では、全てを遂行することは不可能である。勤務時間の増加や情報共有の手段、教員と連携Co.をつなぐ教員の配置など、県に要望しながら、連携Co.がうまく機能するための環境を整えていくことが重要である。

3 点目は、地域へのコーディネート機能の充実と評価である。本研究では、学校内の学びを変化させるための矢印(図1の下図に示した左側の矢印)に着目し、連携Co.の役割を考えてきた。そして、その点における役割は明確になり、改善点も見えてきた。しかし、共生社会を実現していくためには、学校の中だけでなく、地域のバリアを下げるためのベクトルへのアプローチ(図1の下図に示した右側の矢印)、すなわち地域へのコーディネート機能を充実させることが大切であるが、この点に関しては今後の課題である。

また、今回見えてきた連携Co.の役割を動的なものとして捉えた時、地域へのコーディネート機能を行うことで、地域の方との相互作用も期待できるであろう。

本研究を通して、誰もが自分らしく生活し、豊かに生活できる共生社会の実現に向かうためには、特別支援学校の「魅力化」は大切な取組であり、「魅力化」において連携Co.が重要な役割を果たすことが明らかになった。今後も上記の課題について検討しつつ、連携Co.と連携しながら特別支援学校の「魅力化」を推進していきたい。また、共生社会を実現していくために、学校の中だけでなく、地域へのコーディネート機能を充実させることにも力を注ぎたい。

引用・参考文献

- ・一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム編(2020)「文部科学省 2019年度『地域との協働による高等学校教育改革推進事業』PDCAサイクル構築のための調査研究『高校と地域をつなぐ人材の在り方に関する研究会』報告書『高校と地域をつなぐコーディネート機能の充実に向けて－社会に開かれた教育課程と高校を核とした地方創生の実現を目指して－』」
- ・岩本悠, 島根大学地域・教育コーディネーター育成プログラム共創ゼミ(2019)「高校と地域社会をつなぐコーディネーター」地域・教育魅力化プラットフォーム編『地域協働による高校魅力化ガイド』岩波書店, p66
- ・海老沢ひとみ(2013)「児童生徒が主体性を身につけるための学習環境の整備～地域との連携を活かした実践～」, 筑波大学特別支援教育研究, 実践と研究, 7, p87
- ・小仲一輝(2013)「高等学校における地域連携に関する一考察－事例の検討からみる現状と課題－」, 京都教育大学実践研究紀要, 13, p 279
- ・佐藤孝二, 清水聡, 小泉清華, 清野祥範(2016)「肢体不自由児における視知覚認知機能の特徴と活用方法について－視知覚認知学習シートの開発－」, 筑波大学附属桐ヶ丘特別支援学校研究紀要, 52, p119
- ・サトウタツヤ編(2009)『TEMではじめる質的研究－時間とプロセスを扱う研究をめざして－』誠信書房
- ・佐藤晴雄(2016)「学校と地域社会の連携」篠原清昭編『免許更新講習から学ぶ教職論 新・教職リニューール－教師力を高めるために－』ミネルヴァ書房, p 139－154
- ・島根県教育委員会(2021)「しまね特別支援教育魅力化ビジョン」
- ・中央教育審議会初等中等教育分科会(平成24年7月)「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」
- ・中村義行(2011)「障がい理解の視点－「知見」と「かかわり」から－」, 佛教大学教育学部学会紀要, 第10号, p 1
- ・安田裕子・サトウタツヤ編(2012)『TEMでわかる人生の経路』誠信書房